

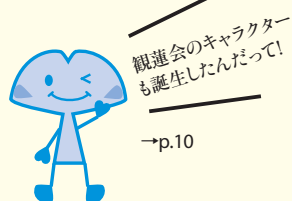
学内広報

2026.8.24

no.1609



農学生命科学研究科附属生態調和農学機構で行われた観蓮会



観蓮会のキャラクター
も誕生したんだって!

→p.10

UTokyo式リカレント教育の現在
ガバナンス改革の進捗を記者会見で発表
本学大学院生がパラ陸上日本代表に

大学の知を、社会の学びへ

東京大学が進める リカレント教育とは？

社会や技術が急速に変化するなか、学びは学生時代だけで完結するものではなく、本学では、社会人の学び直しから教養の探究まで、多様なリカレント教育を展開してきました。その取り組みの全体像を紹介するとともに、今年度から職員の無料受講枠を新設した東京大学公開講座を、秋季講座企画委員長の村本由紀子先生に教えてもらいます。



東京大学リカレント 教育講座ポータルサイト

UTOKYO RECURRENT EDUCATION PORTAL SITE



広がるリカレント教育の取り組み

生涯にわたって学びを繰り返す「リカレント教育」、本学ではどのようなプログラムを提供しているのでしょうか。

学内で実施されているリカレント教育プログラムを情報集約した学内向けデータベースによると、2024年度には26部局で305講座が実施され、分野別には、学際的(29.5%)、人文科学(16.9%)、社会科学(14.7%)、工学(13.8%)、理学(8.1%)等と多彩な講座が開講されていることが分かります。種類別にみると、正規課程(社会人特別選抜)、科目等履修生制度、履修証明プログラム等の「学位プログラム」、幅広いリベラルアーツ教育に裏打ちされた多様な知識の習得を目的とした「教養講座」、そして専門的な知識や高度な技術等を学ぶことを目的とした「リカレント教育プログラム」と大きく3つの体系に分けられます。学内外に向けて情報を提供する「東京大学リカレント教育講座ポータルサイト」(2024年6月開設)には、2026年8月時点で、57の学位プログラム、44の教養講座、33のリカレント講座が掲載されています。

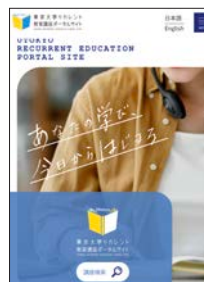
UTokyo Compassでは「大学と社会をつなぐ双方向リカレント教育の実施」を掲げ、「複雑かつ急速に変化する社会に対応するため、大学が社会に対して知を提供する一方、社会課題を学ぶ交流の場として、双方向型リカレント教育を実施する」ことを目標に定めています。急速に発展する科学・技術や激動する社会変革の最先端に対応することはもちろんですが、様々な経験を積んだ社会人が人文・社会科学の核心に触れ直し、新たな気づきや学びを得ることも重要です。リカレント教育を通じて本学

の教育・研究成果を社会へ届けるとともに、社会と大学との新たな接点が生み出されることも期待されています。

大学と社会をつなぐ

2025年4月には学内向けに「リカレント教育ガイドライン」が策定されました。これにより、リカレント教育プログラムの質を担保し、安定的かつ持続可能な運営と規模拡大につながることが見込まれます。本学が提供する多様なリカレント教育は、幅広いリベラルアーツ教育に裏打ちされ、創立以来の学問的蓄積である総合知、専門知を教育によって社会に還元してきたことが特色ですが、ガイドラインやポータルサイトなどの活用により、本学の特色あるプログラムが多くの人々の学び直しの実現に寄与することでしょう。

また、リカレント教育は本学の職員や学生にとっての学びの場でもあります。職員にとっては、本学の教育・研究を知り、自



本学が提供する講座情報を集約したポータルサイト。検索のほか、3カテゴリ(学位プログラム等、教養講座、リカレント講座)、9ジャンルから絞り込み可。
www.recurrent.adm.u-tokyo.ac.jp/

身の業務知識に反映する契機となり、学生にとっては実社会で活躍する多様な学習者との交流を通じて、生涯学習の意義や社会課題について考える機会となるでしょう。構成員の学びの後押しも始まっています。

「教養講座」の一つである「東京大学公開講座」は第142回(2026年春季)から、職員と学生の受講枠(無料)を設定し受講の機会を広げました。秋季公開講座のテーマは「国家と平和」。詳しい内容を右頁でご紹介しますので、関心を持たれた方はぜひ受講を検討してはいかがでしょうか。



「都市と建築」をテーマに、150周年事業のカウンタダウンイベントとの共催で行われた第142回(2026年春季)東京大学公開講座(委員長:津本浩平 工学系研究科長)より。①「人はなぜ都市に集まるの



か」をテーマとした1日目の総括討議。②2日目に登壇した情報学環・越塚登先生の演題は「東京24区」でした。③「災害に強い都市とは」をテーマに話し合われた3日目の総括討議。

第143回東京大学公開講座「国家と平和」企画委員長に聞く

公開講座の見どころは？

切実な現代的課題と向き合う

——今回のテーマを「国家と平和」としたのはなぜでしょうか？

もともと150周年記念事業のテーマリストの一つでした。私がこのテーマに魅力を感じた理由は、現代性と普遍性を併せ持っているからです。何よりもまず、これは今を生きる私たちにとって切実な問題です。世界各地で戦争や紛争が続き、サイバー攻撃やAI技術をめぐる新たな課題も生まれています。気候変動やパンデミックのように、一国だけでは対応できない問題も増えています。

同時に、このテーマは人類の歴史を通じて問い続けられてきた、時代を超える課題でもあります。国家とは何か、平和とは何か。歴史学や哲学、政治学をはじめ、多くの学問が長い時間をかけて向き合ってきました。150年という大学の歴史の節目に位置付ける意味でもふさわしいと考えました。

——今回のプログラム構成について教えてください。

学際的なテーマなので、法学、歴史学、宗教学、国際政治学、経済学、情報工学など、多彩な分野の研究者にご登壇いただきます。

特徴的なのは2日目です。ジャーナリストの船橋洋一さんの著書『戦後敗戦』を題材に、船橋さん、国際政治学の鈴木一人先生、日本史の加藤陽子先生が特別討論を行います。総括討議に100分を割く異例の構成ですが、「国家と平和」を現代日本の問題として考える貴重な機会になると思います。

す。3日間を通して、戦争の記憶や歴史を振り返る議論から、現代社会が直面する課題を経て、新しい技術がもたらす可能性や未来の平和へと視線を移していく構成にしました。過去・現在・未来という時間軸に沿って緩やかなつながりを持たせています。

異なる知が交わる面白さ

——村本先生が考える公開講座の魅力は为什么呢？

総合大学には、多様な学問や研究者が集まっています。時間軸も扱う地域も方法論も異なる知が一つのテーマに対してアプローチし、互いに影響しあう。それが大学の大きな強みです。私が特に楽しみにしているのは、(2日目の特別討論を含めた)各日の「総括討議」。それぞれの先生の講演後に登壇者全員で行う討議です。悠久の歴史を遡る研究や情報デザインの研究など、異分野の研究者たちの議論が交差するとき、どんな新しい見方が生まれるのか。事前には誰にもわかりません。その予想できないインタラクションをライブで見ることができます。

私自身も2019年の公開講座に登壇したことがあります。その回のテーマは「氣」でした。社会心理学を専門とする立場から、いわゆる「空気を読む」という暗黙の規範のような現象についてお話をしました。

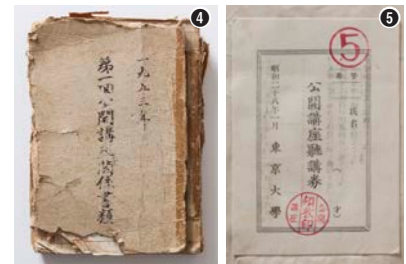


第143回公開講座企画委員長
人文社会系研究科長
村本由紀子
MURAMOTO Yukiko

その時も経済学や言語情報学など多彩な分野の先生方が参加されていて、お互いの話を聴いているうちに共通の関心が見えてきました。登壇者自身も楽しい。そんな空気が聴講者にも伝わると思います。

——今年度から「職員枠」(各日先着20名)も設けられました。

この機会にぜひ来ていただきたいです。どんなテーマであっても、必ずそれぞれの聴き手にとって面白いと思えるポイントがあるのではと思います。テーマそれ自体でなく、登壇される先生方のアプローチの独創性に惹かれることもあるでしょう。東大が総合大学として持つ研究の幅広さを、最も身近にいる私たち自身が知らないのはもったいないことです。公開講座を通じて、その多様な知の世界に触れていただければと思います。



●東京大学公開講座 第143回(2026年秋季)「国家と平和」プログラム

第1日(10/31)「戦禍の記録、国家の記憶」

東大150周年イベントについて	津田 敦
開講の挨拶	村本由紀子
国家は平和の敵か味方か	瀧川裕英
雷を慰め、平和を祈る：宗教者の戦後復興	西村 明
揺らぐ国際社会を支える共通の価値とは	キハラハント 愛
OSINTとデジタルアーカイブー公開情報から考える国家・戦争・災害	渡邊英徳
総括討議	三浦あゆみ

第2日(11/14)「戦後日本の危機」

戦後日本が直面した諸危機とそこからの教訓	船橋洋一
戦後日本の諸危機を日本近代史から読み解く	加藤陽子
戦後日本の諸危機と国際政治	鈴木一人
総括討議	宇野重規

第3日(12/5)「国境を越える未来」

人災・天災の経済学研究フロンティア	澤田康幸
デジタルネイチャー時代の国家と平和	落合陽一
世界をつなぐインターネットー明と暗、そして未来を考えるー	江崎 浩
総括討議	芳賀京子
閉講の挨拶	津田 敦

昭和28年に始まった公開講座。現在は年2回安田講堂で開催しています。今秋の第143回公開講座は150周年カウントダウンイベントの一環。対象は社会人・一般、大学生、高校生で、定員は各日1000名。受講料は各日3,000円。高校生は無料で受講でき、各日先着200名までとなっています。今年度からは本学職員・学生向けの無料受講枠も新設されました。職員枠は20名、学生枠は100名でいずれも各日・先着順です。申込方法はUTokyo Portalをご覧ください。

④第1回公開講座の事務綴り。聴講者集計から会場の使用申請書、印刷会社の領収書まで様々な事務資料が記録されています。⑤第1回の聴講券。裏面の聴講者心得には「履物は靴又は草履のこと」と書かれていました。



～シリーズ・ガバナンス改革～

ガバナンス改革の進捗を 記者会見で報告

7月15日、ガバナンス改革進捗状況に関する定例記者会見が行われました。一連の不祥事について報告した4月8日の記者会見で言及された、3ヶ月ごとに改革の進捗状況を紹介する機会の1回目として設けられたものです。伊藤国際学術研究センターで行われた会見には、藤井輝夫総長と最高リスク責任者（CRO）の桑原昌宏理事が出席。改革の進捗状況についてそれぞれ報告した後、報道陣からの質問に応じました。質疑応答を抜粋して掲載します。

※記者会見の司会は大越慎一コミュニケーション戦略本部長が務めました。

報道陣との質疑応答より (要旨)

記者 モニタリング委員会からは概ね妥当との評価があったとのこと。改革の進捗についてどんな感触をお持ちですか。

藤井 改革の方向性についてはひと通り出揃ったと考えています。ただ、改革項目によっては、方向性は定まったものの、実際に全学で動かすにはじっくり規則に落とし込むことが必要なものもあります。それができれば、実効性を見る次のステップに進むことになると思います。

記者 10月に「東京大学病院」としてスタートを切るとのこと。そこに向けて、特に力を入れるべきことは何ですか。

藤井 重要なのは組織風土を変えることで、そのためには学内コミュニケーションの促進が必要です。Open Dialogueをはじめとする場を設け、意識の共有を図ります。

記者 今後、懲戒処分においては実名の公表が原則となるのでしょうか。

藤井 現状は、被処分者の実名をすぐに公表することは行っていないですが、説明責任の観点から、公表の在り方を見直すべきとの声もあり、今後取扱いを検討していきます。

記者 総合研究奨励会の不正行為はどう受け止めていますか。また、国際卓越研究大学の審査への影響をどのように考えますか。

桑原 この件の原因は総合研究奨励会のガバナンス不全だと考えています。ただ、工学系研究科と奨励会は長年にわたって連携しており、奨励会の理事の大半が工学系研究科の教員です。研究科と本部が一体となって奨励会のガバナンスを確認し、必要な方策を取ることが必要です。4月にプロジェクトチームを作って取り掛かり、外部の

弁護士も入った上で調査を続けています。

藤井 国際卓越研究大学については、継続審査となっている状況です。その判断について何か申し上げる立場にはございません。

記者 ガバナンス改革においては、関連法人に関する記載はありませんでした。今後はその点も盛り込まれるのでしょうか。

桑原 特定関連会社や関連公益法人等について、適切なガバナンスの確保に向けた取り組みを早急に整理し、何が問題だったのかをしっかりと検証していきます。

記者 病院の直轄化は10月とのこと。4月の会見では6月に行うと言われませんでしたか。また、懲戒手続き期間の目標を設定するのはこれが初めてですか。手続き迅速化には拙速の恐れもあるのではないですか。

藤井 6月までに直轄化を決定する旨を4月にお伝えし、実際に6月の役員会で決定しました。診療を含め多くの規程の見直しに時間を要するため、施行は10月としています。懲戒は、案件ごとに事情が異なり、一律に6ヶ月以内で行うものではありません。平均2年4ヶ月もかかるのは常識から乖離しているとの指摘を受け、まず6ヶ月を目標にすることを共通の理解としました。期間の目標を明確化したのは初めてです。

記者 桑原理事が東大の中に入ってみて感じたことを教えてください。

桑原 大学とは何かをしっかりと学ぶのには時間がかかると思いました。また、民間で働いてきた身からすると、率直に言って、相互に干渉しない風土を感じたことはありました。必ずしも記録が明確に残されていないと感じる部分もありました。

記者 Open Dialogueを開催してみて、双方向の対話ができたと感じますか？

藤井 はい。執行部側の説明を最小限にし、意見をなるべく出してもらう場にしたいと意識して進めているなかで、コンプライアンスのマニュアルがほしいとか、学内規則について気軽に聞けるAIチャットボットを導入してほしいとか、具体的な提案が多く出てきました。具現化を検討していきます。

記者 あらためて、東大病院に求めたい役割について教えてください。

藤井 病院は医学の教育研究の実践の場であり、同時に最先端の診療という役割があります。専門性が高いために蛸壺化が進み、診療科間の情報共有が足りないことがコンプライアンス意識の低下を招いているとの指摘を受け、複数の診療科をまとめたグループ制を設けました。研究室の壁を取り払ってコラボが起きやすい環境を作り、新しい研究が生まれることにも期待しています。

Open Dialogue

7月末までに各キャンパスで7回実施した対話集会には、計920人が参加。スピークアップや相談体制の充実、心理的安全性の担保や組織風土の改善、対内・対外コミュニケーションの推進、リスク・ガバナンスの強化、啓発・研修・人材育成の重要性、研究環境の改革など、寄せられたアイデア・意見は計150件にのぼっています。UTokyo Portalの特設コーナーでは、各回で配付された資料や対話の様態を収録した動画を公開中。ガバナンス改革に関する入力フォームも用意しています。打刻の際などにぜひ覗いてみてください。



※Open Dialogueの第8回は9月3日に安田講堂で、第9回は9月7日にオンライン（英語）で開催されます。

～キャンパス・ニュース～

医学系研究科の大学院生が アジアパラ競技大会の 陸上日本代表に!

愛知・名古屋で開催されるアジアパラ競技大会(10月18日～24日)のパラ陸上日本代表に、本学の大学院生が選出されました。宮崎から上京し、創傷看護学を学びながら短距離走の練習に励んでいる中川もえさん。これまでの歩みと本大会に懸ける思い、練習の現状などについてお訊ねしました。

●陸上競技を始めたきっかけは?

小5で初めて運動会のリレー選手に選ばれたとき、客席から「速いね」と声が聞こえてきたのがうれしくて、友達がいた近所の陸上クラブに入りました。タイムを測って向上が目に見えるところが好きでした。

●パラ陸上のT47というクラスですね。

数字の十の位は障害の種類、一の位は障害の程度を表します。数字は大きいほうが軽度で、47は切断の区分で一番軽いクラスです。私は先天性の右手全指欠損で、幼稚園の頃は意識しませんでした。小学校になると右手のことを言う人が出てきて、他の人と少し違うと気づきました。

●パラリンピックを意識したのはいつ?

中1の頃にクラブのコーチが辻沙絵選手の記事を見せてくれました。リオ大会では400mで銅メダル。同じクラスの先達に刺激されました。その後、辻選手の引退試合で私が初めて勝って、「あとは頼んだよ」と言ってもらい、もっとがんばろうと決めました。100mでは辻さんの12秒69が日本記録。私の自己ベストは昨年9月に出した12秒72。10月に更新したいと思います。

●宮崎大学を卒業後は迷わず大学院へ?

アスリート雇用の会社に入って陸上を続ける道もありましたが、看護学科で学んだことを無駄にしたくなくて。コーチに相談したら、どうせなら一番難しそうな道と言われて、大学院進学を考えました。実は、年に1回、宮崎大学に講義に来ていたのが、いまの研究室の仲上豪二朗先生です。車椅子競技の選手にも「褥瘡^{*}」ができると前に聞いたことがあって。1年生のときに講義ポスターでこの言葉を見かけて受講し、4年間毎年参加しました。仲上先生は車椅子バスケの褥瘡の研究もしていて、研究を臨

床のサイクルを重視しているのに惹かれました。面談の際、陸上もがんばってねと教えてください、東大進学を決めました。

●上京に不安はなかったですか?

東京での生活というよりも、練習環境が変わることに不安があり、友達と占い師に相談しました。友達が恋愛の話を開くなか、私は練習環境のことを聞いていましたね。いざ東大に来ると、充実した練習環境に驚きました。御殿下ジムもよく使いますし、トレーナーさんがいろいろ教えてくださいます。

●どんな練習をやっているのでしょうか?

いまは弱点に着目し、フォームを変えようとしています。腰が落ちているとか地面を蹴る際に脚を巻いているとか、以前から指摘されてきました。言われてもピンと来なかったんですが、2年ほど前から少し意味がわかるようになってきたので、フォーム改造を決心しました。ただ、いまはリハビリ期間。慢性的な痛みを我慢して練習していたら股関節の痛みが悪化した感じです。体の使い方が悪くて使うべき筋肉を使えていないのかもしれない。新しい走り方を体に覚え込ませる好機と思っています。

●100mと200m。どちらが得意ですか?

ずっと100が主戦場でしたが、タイムの伸びは200のほうが大きく、昨年4月に日本記録を出しました。アジアランキングも、100では4位ですが200では3位です。私の場合、100は最後まで全力でいけますが、200ではペースを考える必要があります。まだ走り方がわかっておらず、スタート前には「どうやって走るんだっけ?」と自問することも。のびしろが大きいのだと前向きに捉えています。(取材日:7月21日)

医学系研究科修士課程1年
中川もえさん

①スタートでは左手を地面につけ、右手は後ろに伸ばそう。「以前は右手に義手をつけて両手を地につく4点スタートでしたが、代表合宿で教えてもらった3点スタートを導入したら記録が伸びました」(中川さん)。②技術面をサポートする竹井尚也助教(元スプリンター)と。「最初に走りを見たとき、いい意味で未完成だと思いました。まだまだ記録は伸びるはずだ」(竹井) ③陸上運動部支援基金をもとに、昨年8月にグラウンド脇に新設された部室棟。



※同じ姿勢が続くことで体重で圧迫されて血流が悪くなり、皮膚にただれや傷ができた状態

一五〇年史編集室通信 plus

題字：貝田綾子

第3回



すべての歴史は現代史であり、その物語 (narrative) は望ましい未来を創出していくための資源です。来たる創立150周年に向けて日々進められている年史編集の現況を、当事者の声を通して隔月で伝えます。

運動会黎明期の「部」は用具管理の組織だった!?

百五十年史編集室

中西啓太



私は今年140周年を迎えた東京大学運動会の「部」の歴史を調べています。実は初期の実態はよくわかっておらず、百年史でも記述がありませんでしたが、文書館に残る史料群を調べたところ、部に関する規則の複製等が出てきました。

ボールを使う競技でひと括り

1880年代のものと思われる「運動会規則」には、漕艇、柔道、球戯、器械運動、自転車、撃剣の6部が登場します（撃剣は剣道のこと）。球戯部ではサッカー、野球、テニスとボールを使う運動が想定されていました。自転車部では学生が自転車を借りる際の規則が書かれ、器械運動部では垂鈴などの用具を壊した場合の弁償方法などが書かれています。当初の部は現在と違って用具管理の組織だったようです。陸上部がないのは、走るだけなら用具がなくてもできるためでしょうか。

走ったり跳んだりする運動会は以前から学内で行われていました。次第に春は漕艇、秋は陸上の大会を行うのが恒例となり、その運営が運動会の主な役割でした。主眼は学生に運動機会を提供すること。部は対外試合をして競うための組織

ではなかったと考えられます。

明治期に法律上の大学は帝大だけでしたが、1918年の大学令公布以降に大学数が増えたことで、大学間の対戦が活発化します。当時、東大が強かったのは確かで、漕艇、バスケ、サッカーなどでは東大出身者が日本代表として活躍しました。旧制高等学校からスポーツ経験の豊富な学生が帝大に来やすい傾向があったことが、東大勢の優位性につながったと思います。

1920年代以降の史料では、部に属する学生を選手と呼び、それ以外を一般学生と呼んでいます。運動会の理念は学生に運動機会を提供することなのに、選手にその機会や予算が偏るのはおかしいとの批判を受け、各部は一般学生向けの活動を増やしました。たとえば、野球部は一般学生向けにスポンジ野球大会を主催。テニス部は一般学生向けの講習を検討し、馬術部は選手班に加えて一般班を設けていました。部員と一般学生との垣根を低くしたいと考えていた跡が窺えます。

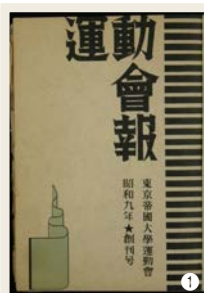
人間形成に資するスポーツ？

学業が本分の学生がスポーツに興じていいのかという声や、対外試合が白熱し

すぎて野蛮だという声も早くから上がり、様々な学校での意義を示そうと、スポーツは精神修養によいという主張が出てきます。たとえば一高の機関誌で「武士道の野球」という表現をしたり、スポーツが人間形成に役立つという議論を展開して、学校での生き残りを図ったわけですね。このことが部活動の教育的側面を強め、教員と学生、先輩と後輩といった上下関係の強化につながったのかもしれない。

一方で、部活には入らないサークル活動も気になっています。1970年以降はオリエンテーション委員会の雑誌『植音』にスポーツサークルの記録があるので、その変遷を調べ始めるところです。サークルから部に昇格した例では、既存の部や大学への働きかけ、活動の参加率を上げるための工夫といったドラマもあったようです。

編集室員としてはもちろんですが、学生時代をハンドボール部で過ごし、現在は部長を務めている身としても、百五十年史記念叢書のスポーツの巻のなかで、東大スポーツの歴史をしっかりとまとめたいと思っています。



①②③④1934年創刊の『運動会報』第1号～4号の表紙。初期の誌面には存在意義を謳う論説も載っていました。⑤最新号はアメフト部が表紙。現在は部員勧誘の情報が主です。⑥運動会140周年イベントで東大スポーツ史を解説する中西先生。



東大運動会クイズ

- 隅田川沿いにあった運動会の施設は？
→ボートを収蔵する艇庫。隅田川沿いの須崎村にありました。艇庫建設前には、学生はくじ引きで使用权を得ていたようです。
- 器械運動部規則にある「抛槌」とは？
→ハンマー投げ。同規則にはそのほかにも棍棒、球竿、竿飛、長飛、抛砲丸といういまでは見慣れない言葉が登場していました。
- 球技で最も部活動の成立が早いのは？
→1902年の庭球部。対外試合の記録が最も古く残る球技で、初期はソフトテニスでしたが1920年から国際規格の硬式に移行。
- 一番新しくできたのは何部？
→フットサル部。約6年間の審査期間を経て2025年に運動会に加入しました。現在は総務部を含めて全60部が所属しています。



UTokyo Brand Studio 実験中!

第7回

文学部3年 川口真悠子

デザインで届ける東大の魅力

私がブランドスタジオのメンバーとして活動を始めたのは去年のAセメスターのことです。趣味で続けてきたイラストやタイポグラフィ、デザインなどを見て周りの人が喜んでくれるのが嬉しくて、「これを何かに活かせないかな」と思っていた時に募集の掲示を見つけたのをきっかけに応募しました。普段使いできるような東大のグッズがあればいいな、という思いも応募の追い風になりました。

参加当初から、勉強会などを通じてブランディングに関するお話や、現役で活躍されているデザイナーの方のお話をうかがうことができたのはとても新鮮でした。また、学生スタッフは多様な学科・学年のメンバーから構成されており、様々な方向からアイデアを持ち寄って共にプロジェクトを作り上げています。

ブランドスタジオとして行ったさまざまな活動の中でも、今年の五月祭は特に印象に残っています。企画にあたって学生スタッフの間でアイデアを出し合い、一からオリジナルのデザインを考案しました。企画の過程では、各メンバーの個性を反映しつつ、実際に東大で学生生活を送っているからこそ生まれるようなグッズを考え、メンバー同士でブラッシュアップしてきました。私は「本郷」と「駒場」という文字をデザインしてあしらったハンカチをデザインしました。

五月祭当日にはグッズが予想以上に好評を博し、1日目ではほとんど売り切れてしまうほどでした。自分たちで考えたデザインが多くの人に届いたことが嬉しく、メンバーで喜びを分かち合いました。中でも嬉しかったのは、ブースに立ち寄ってくださった来場者の方々と直接お話しできたことです。その際にデザインに対して好意的なコメントをいただけることもあり、喜びもひとしおでした。

これからも一人の東大生として、そしてブランドスタジオの一員として、東大の魅力を外部に届ける架け橋として、活動していきたいと思っています。



「本郷」と「駒場」の文字をデザインしたハンカチ

蔵出し! 文書館

ぶんしよかん

The University
of Tokyo
Archives



第63回

収蔵する貴重な学内資料から
140年を超える東大の歴史の一部をご紹介します

消毒された手紙

第16代総長を務めた矢内原忠雄は、よく知られているように、無教会主義のキリスト教徒でした。当館では、その伝道活動を物語る矢内原宛の書簡を多く保存しています。

写真は、そうした書簡のひとつです（参照番号：F0220/S06/0212）。この書簡は国立ハンセン病療養所のひとつ大島青松園（香川県）の入所者から届いたものです。矢内原はここを幾度か訪問し、入所者たちと交流をもちました。愛媛県今治市出身の矢内原は、かつてハンセン病患者のひとつの生き方だったお遍路さんになじみがあったことが指摘されていますが、キリストがハンセン病患者の病を癒した奇跡はキリスト教にとって重要な逸話であり、この点からも、矢内原にはハンセン病患者との交流はとても重要な意味を持つものだったのでしょう。書簡の差出人は療養所で矢内原の講演を聴き、その思想・信仰に深く共鳴し、たびたび手紙を出しています。



さて、封筒には「消毒済」と押印されています。これは療養所から所外に発送される際に、気化したホルマリンで消毒されたことを示すものです。この措置は、1953（昭和28）年に定められた「らい予防法」（1996（平成8）年廃止）第18条「入所患者が…使用し、または接触した物件は、消毒を経た後でなければ、当該国立療養所の区域外に出してはならない」に拠るものと考えられます。

しかしここで指摘したいのは、ハンセン病の感染力はとても弱く多くは接触しても発症しないことは昭和の初めから医学的に知られていたし、治療薬は1943（昭和18）年にアメリカで発明されてハンセン病は治療可能になっていたし、その薬は戦後日本にも入ってきて厚生省は1949（昭和24）年にその手配の予算をつけていた、にもかかわらず、患者を隔離して療養所外との接触を禁じるという、いわば科学的には解明されている事実を踏まえない法律が、1953（昭和28）年に成立しているという事実です。当事者たちの思いはいかばかりだったのでしょうか。

ほんのひとつのゴム印ですが、それが静かに私たちに見せる世界は重く、深く、私たち一人一人がどう社会に向き合うべきかを自ら考えよと語りかけているように思われます。

（准教授 森本祥子）

ワタシのオシゴト 第243回

RELAY COLUMN

教養学部等学生支援課
奨学資金チーム

古屋香菜

学生の「学び」を支える

環境美化チームのお花と
コマバのユータスと私

2026年4月より奨学資金チームに異動し、日本学生支援機構(JASSO)の奨学金を担当しています。家庭の経済状況にかかわらず、学生の皆さんが学びを継続できるよう支えるお仕事です。

窓口には、経済的な悩みから深刻な表情で相談に来る学生も少なくありません。制度の説明をし、必要な手続きを一緒に整理し、最後にほっとした表情で帰っていく姿を見送るとき、大きなやりがいを感じます。

一方で、目下の課題は情報発信の方法です。メールを確認しない学生も増えているため、手続きの締切りなど大切な情報をいかに確実に届けるか、日々試行錯誤を重ねています。

休日には、神宮球場での野球観戦や城めぐりを楽しんでいます。全国の城跡を訪ね100名城のスタンプを集め、ご当地グルメを味わうのが私の至福の時間です。



「不落の城」金山城はすごい山城でした

得意ワザ：麻辣香鍋を作ること

自分の性格：好奇心の赴くまま、広く浅く、時々深く

次回執筆者のご指名：尾花道子さん

次回執筆者との関係：一緒に新規採用職員研修を受けた仲間

次回執筆者の紹介：気さくで優しい頼れる同期

デジタル万華鏡 第53回

東大の多様な「学術資産」を再確認しよう

附属図書館アジア研究図書館
上廣倫理財団
寄附研究部門(U-PARL)中井勇人
AKMATALIEVA Jakshylyk

ユーラシア学術資源のデジタル化

Объ Ирригации въ Туркестанскомъ краѣ
(アジア研究図書館蔵、1894年刊)

東京大学附属図書館アジア研究図書館上廣倫理財団寄附研究部門(U-PARL)では、デジタルアーカイブ(DA)「アジア研究図書館デジタルコレクション」のサブコレクションとして、2025年10月に「中央ユーラシア学術資源コレクション」を、2026年5月に「東北アジア学術資源コレクション」を公開した。それぞれ中央ユーラシア(中央アジア、チベット、モンゴリア、シベリア、ロシア極東、ヴォルガ・ウラル地域、コーカサスなど)と東北アジア(朝鮮半島、マンチュリア、環日本海地域など)の資料のデジタル化を目的としている。

中央ユーラシアを冠し、その言語・歴史・民族など様々な分野の資料を体系的に含むDAの公開は画期的である。また東北アジアについても、関東大震災を生き延びた白山黒水文庫(旧満鉄寄贈)資料や満洲語資料、朝鮮の族譜など貴重な資料のデジタル化を進めている。

本学では戦前以来、白鳥庫吉(歴史学)や小倉進平(言語学)など様々な研究者によって、こうした資料が蓄積されてきた。その中には満洲やモンゴルのように中央ユーラシアと東北アジアの双方にまたがる主題の資料も多い。ゆえに、これらのコレクションは相互に深く関連する。ユーラシアを一体的に捉えた戦前以来の本学の知の蓄積を掘り起こし、次世代につなぐ新しいデジタル学術基盤がここに成立したのである。今後はモンゴルやチベットなどについての資料もさらに拡充予定である。本年度のU-PARLでは、かかるユーラシア学術資源のデジタル化を主題に、資料展やワークショップなど学術企画を順次実施している。



『旧清語』(総合図書館蔵、清代の満洲語)

<https://da.dl.itc.u-tokyo.ac.jp/portal/collection/asia>

インタープリターズ・ バイブル

第228回

総合文化研究科教授 松田恭幸
科学技術コミュニケーション部門

UTokyoDesignへの(勝手な)期待

先日、日本の大学進学者の中で理工系の分野に進む割合は OECD加盟国の中で下から2番目と低いと知って驚いた。というのは、日本の人口1万人あたりの研究者数は、韓国、ドイツに次ぐ3位と高い水準にあるからである。この二つを並び合わせると、日本の理工系学部・大学院は研究者をうまく育成しているとも見られるが、研究以外の分野で社会の中で活躍する人の中に理工系の分野を学んだ人は少ないということでもある。市民が研究者集団を「自分たちとは違う」人たちの集まりだとみなしかねないのではないかと、市民と研究者の協働が生まれにくい環境を作っているのではないかと危惧してしまう。

理工系へ進学する割合が低い理由として、まずは大学進学者数に対して理工系学部の定員が少ないことが指摘できる。理工系の学部の多くは国公立大学に設置されており、8割近くの大学生が学ぶ私立大学は、実験装置等にお金がかかるにもかかわらず、必ずしも受験生に人気があるとは言えない理工系学部の定員を増やすことに消極的である。そこで、受験生に理工系の人気がない理由を尋ねると、「理工系はキツイ」「難しそう」という答えが返ってくることが多い。PISA2022調査報告の中にある、OECD加盟国全体では数学不安が高くなるにつれて数学達成度は低くなる傾向があるなかで、日本は数学的リテラシーの得点は世界トップレベルであるにもかかわらず、数学不安も高いという結果は示唆的で、日本の理系分野の教育は、中等教育段階からスパルタ式で鍛え上げ、それに適した比較的少数の学生を理工系に進学させて効率よく研究者に育て上げる、という形で最適化されているように見える。

日本全体の理工系教育のあり方を見直し、学部教育の目標を研究者となるための基礎教育ではなく科学・工学リテラシーの修得とした上で入学の枠を広げ、研究者の育成は基礎作りから大学院で行う、という形への移行が唱えられることもあるが、すでに局所最適化されたシステムからの移行は、その過程で大きな混乱(とそれに伴う研究力の低下)を生むことが予想され、容易ではない。とすると、既存の理工系教育と並行した形で、科学・工学的リテラシーに加えて、市民や行政との協働スキルなども含めた新しい「リベラル・アーツ」を学ぶ「教養」学部を構想したくなる。そうした試みの一つとして、この秋に募集が始まるUTokyoDesignに、科学技術コミュニケーションの面からも期待している。

科学技術インタープリター養成プログラム

きさんのき

寄付でつくる東大の未来

第82回

ディベロップメントオフィス
シニアディレクター

庄司英里

東大蔵元会「150周年に乾杯！」



東大蔵元会のみなさん

「日本酒がおいしかった」「東京大学を応援したかった」……そんな声があふれる一日となったのが、6月に伊藤国際学術研究センターで開催した、ディベロップメントオフィスと東大蔵元会の共催による利き酒イベント「150周年に乾杯！」です。

東大蔵元会は、卒業生が蔵元を務める18歳で構成される同窓会です。毎年ホームカミングデイ(银杏祭)に人気の利き酒企画を出店、東京大学基金への寄付などを通じて母校を支援してくださっています。

このイベントは、ホームカミングデイだけでは伝わりきれない蔵元会の魅力や卒業生同士のつながりを、より多くの方に知っていただきたいという思いから生まれました。昨年6月に「酒は人をつなぐ」をテーマに初開催し好評を得たことから、今回は150周年応援イベントとして実施しました。

当日は卒業生や教職員、一般の方など360名が参加、全員で東大蔵元会150周年特製の杯を掲げて乾杯しました。会場では各蔵自慢の日本酒を楽しみながら、卒業生が旧交を温めたり、初対面同士が酒談義に花を咲かせたりする姿が見られました。また、日頃は大学との接点が少ない方々にも、東京大学の教育・研究や150周年のその先に描く未来をお伝えする機会となりました。

その共感具体的な応援にもつながり、当日は113件のご寄付をいただきました。一般来場者からのご支援も多く、日本酒をきっかけに東京大学を身近に感じ、未来への挑戦を応援したいと思ってくださる方が増えたことは大きな成果です。

さらに、このイベントは全国で活躍する卒業生蔵元同士が母校への思いを共有し、新たなつながりを築く場にもなっています。こうした交流は東大同窓会ネットワークの強化・拡大にもつながっています。



全員で「東大150周年に乾杯！」

なお、東大蔵元会は今年もホームカミングデイに出店予定です。10月17日(土)、皆さまをお待ちしています！

トピックス 全学ホームページの「UTokyo FOCUS」(Features, Articles)に掲載された情報の一覧と、そのいくつかをCLOSE UPとして紹介します。

掲載日	担当部署・部局	タイトル（一部省略している場合があります）
7月13日	数理科学研究科	【注意喚起】数理科学研究科教員を装ったウェブページにご注意ください
7月13日	総合文化研究科・教養学部	川崎聡史講師が日本ドイツ学会奨励賞を受賞
7月14日～	広報室	知ればますます気になってくる!?「関西と東大」小ネタ集 プログラム参加学生座談会で見える体験型活動 in 関西! 東大の女性主務の歴史を拓いた紀州育ちの野球ガチ勢＝奥畑ひかりさん 駒場16号館屋上の天文台を再生 大和国から来た「思兼神」＝直川史寛さん / 広報誌「淡青」52号より
7月16日	総合文化研究科・教養学部	広域科学専攻の学生らがACM FAccT 2026で優秀論文賞を受賞
7月21日	理学系研究科・理学部	大越慎一教授がフランスのレンヌ大学より名誉博士号を授与
7月23日	東洋文化研究所	パッタジツ准教授が三島海雲学術賞を受賞
7月23日	東洋文化研究所	松田康博教授が読売・吉野作造賞を受賞
7月31日	本部コミュニケーション戦略課	令和8年熊本地震について（藤井総長メッセージ）
7月31日	未来ビジョン研究センター	第8回東京大学UTokyo Compass推進会議（UCI）アドバイザリーボードの開催
8月4日	大学総合教育研究センター	UTokyo MOOCの医療倫理講座が無料公開
8月4日	宇宙線研究所	チェコとハイパーカミオカンデ実験についての覚書を締結
8月5日	大学総合教育研究センター	UTokyo OCW／東大TV 20周年記念シンポジウム 動画公開
8月6日	人文社会系研究科・文学部	沼野充義名誉教授が第82回恩賜賞・日本芸術院賞を受賞
8月7日	本部コミュニケーション戦略課	本学の財務状況に関する報道について
8月7日	総合文化研究科・教養学部	ACL2026にて言語情報科学専攻 大関研究室の2件の論文が受賞

就任の挨拶

よりよい病院にするために

7月より執行役・副学長として病院運営を担当しています。

まず、一連の不祥事で世間の皆様、患者の皆様、学生の皆様、職員の皆様に多大なるご迷惑と心配をおかけしてしまったことを、心からお詫び申し上げます。

附属病院は10月より大学直轄となり、名称も東京大学病院となります。まず大きな問題点であった、外部資金の管理やコンプライアンス問題への対応をより厳格に行えるような体制作りを大学の指導のもと進めているところです。例を挙げますと、産学連携部門を作り、病院における外部資金に伴う受入審査から実施管理、報告、利益相反管理に至るまでの実務を一体的に行います。また、病院内にコンプライアンス推進部という病院横断的な組織を新設し、各部署より1-2名、合計200名を超

える担当者を配置いたしました。これらの担当者を通して、コンプライアンスを推進する意識を病院の末梢まで浸透させ、不正が起きにくい文化を醸成したいと考えております。

また財務改善にも取り組んでおります。昨年度は23.3億円の赤字を出してしまいました。現在、本部CFO指導のもと、救急患者の受け入れ、ロボット支援手術や移植医療の環境整備、といった様々な方策を進めており、少しずつ成果が得られているところです。一方で、先端医療の開発、優れた医療人の育成といった研究面、教育面での東大病院の大切な目標にもしっかりと取り組んでゆきたいと思います。

よりよい病院を作り、社会の信頼を取り戻すために、尽力する所存です。これからよろしくお願ひ申し上げます。



執行役・副学長
久米春喜 KUME Haruki

平成 元年3月 本学医学部医学科卒業
平成12年3月 本学大学院医学系研究科外科学専攻博士課程修了 博士（医学）
平成15年4月 本学医学部泌尿器科講師
平成20年7月 本学大学院医学系研究科泌尿器外科学分野准教授
平成28年4月 国立国際医療研究センター泌尿器科科長
平成29年4月 国立国際医療研究センター手術管理部門長
平成29年12月 本学大学院医学系研究科泌尿器外科学分野教授
令和元年4月 本学医学部附属病院病院長補佐
令和5年4月 本学医学部附属病院副院長
令和8年1月 本学医学部附属病院病院長事務代理
令和8年6月 本学医学部附属病院病院長
専門分野：外科学・泌尿器外科学
研究内容：1) Fujii Y, Kume H, et al "Molecular classification and diagnostics of upper urinary tract urothelial carcinoma." *Cancer Cell* 39 (2021): 793-809.
2) Takahashi J, Kume H, et al "Spatial Multiomic Analyses Reveal Carcinogenic Pathways in End-Stage Renal Disease." *Cancer Discov* 16 (2026): 478-496.

表紙について 今号の表紙写真は、農学生命科学研究科附属生態調和農学機構のハス見本園で7月17～18日に行われた観蓮会の様子です。毎年人気のイベントですが、今回は2日間で約3,100名の皆さんが来場し、大盛況となりました。2,000年の眠りから目覚めた「大賀蓮」をはじめ、東京大学の名称で品種登録された「月のほほえみ」や「緑地美人」など、多彩なハスの花々が夏の朝を彩りました。

今回、新たに観蓮会公式キャラクターが誕生。さっそく記念の特製グッズ（うちわ）に登場し、来場者に配布されて人気者になりました。頭到大賀蓮の花をのせ、ハスの葉シャワーを披露するのが大好きだというキャラクターの名称を募集する試みが行われ、多数の応募の中から「はす（大賀蓮）」と丸いフォルム、ハスの葉の形を表す「まる」を組み合わせた「はすまる」に決まりました。



↑ふっくらした体は大賀博士が花を咲かせるために使った羽釜がモチーフ。葉にたまった水を使う「ハスの葉シャワー」が得意技です。



CLOSE UP UTokyo OCW / 東大TV 20周年シンポ動画を公開

(大学総合教育研究センター)



登壇者の皆さん：(左から) 佐藤浩章 大学総合教育研究センター教授、瀧川幸加 中央大学特任助教、木村見悟 KDDIリベラー法人事業リーダー、若山正人 ドワンゴ学園ZEN大学学長、吉見俊哉 本学名誉教授、宮川繁 マサチューセッツ工科大学名誉教授

大学総合教育研究センターは、本年3月12日に本郷キャンパスで開催した「UTokyo OCW / 東大TV 20周年記念シンポジウム オープンエデュケーションの未来：大学と社会をつなぐ新たな学びに向けて」の講演動画を、東京大学公式動画メディア「UTokyo Channel」(<https://ch.u-tokyo.ac.jp/>)で公開しました。オープンエデュケーションのこれまでとこれからを議論した記録を、どなたでも無償でご覧いただけます。

UTokyo OCW / 東大TVは、「世界に東京大学の知を開放する」という理念のもと、

2005年から教育コンテンツのオンライン公開に取り組んできました。本シンポジウムでは、オープンエデュケーションの研究者、オンライン教育を基盤とする大学、教養教育動画を配信する企業、そして高等教育の研究者を招き、これまでの知の公開を振り返るとともに、知の共創を通じた次世代のオープンエデュケーションのあり方を展望しました。

当日は会場に58名が参加し、活発な議論が交わされました。本シンポジウムで交わされた「知の公開」から「知の共創」へという議論を、今後の運営にも反映させていきます。



CLOSE UP ハイパーカミオカンデ実験についての覚書をチェコと締結

(宇宙線研究所)



覚書に署名する(左から) 本学の藤井輝夫 総長、カレル大学のJiri Zima学長、パラツキー大学オロモウツのMichael Kohajda学長、KEKの浅井祥仁機構長

2028年の実験開始を目指し、岐阜県飛騨市神岡町で建設が進むハイパーカミオカンデ実験について、ホスト機関の東京大学と高エネルギー加速器研究機構(KEK)はこのほど、チェコのカレル大学およびパラツキー大学オロモウツとの覚書を締結しました。同実験は、世界23カ国が参加する国際共同研究プロジェクトであり、日本との覚書が締結されるのは、ポーランド、スペイン、イタリア、カナダ、フランスに続いて6カ国目となります。

チェコ側から同実験に参加するのは、カレル大学とパラツキー大学オロモウツの2研究

機関です。覚書の締結は各機関の持ち回りで行われ、各組織の長が2026年7月下旬までに署名しました。覚書には、チェコ側が新型光センサー「マルチPMTモジュール」用の光電子増倍管の性能試験、材料の溶出試験やマルチPMTモジュール用の読み出し電子回路を格納するステンレス容器の製造を担当して、実験に参加することなどが明記されています。

ハイパーカミオカンデ実験の事業は2020年2月にスタート。2022年11月から本体空洞の掘削を開始し、2025年7月に本体空洞の掘削が終了するなど建設が本格化しています。



CLOSE UP 大越慎一教授にレンヌ大学名誉博士号が授与されました

(理学系研究科・理学部)



名誉博士号授与式では、レンヌ大学のDavid Alis学長より名誉博士号の学位記、メダル、肩掛けのエピーージュが授与され、記念講演および式典が執り行われました

6月19日、化学専攻の大越慎一教授は、フランスのレンヌ大学より名誉博士号(Doctorat Honoris Causa)を授与されました。レンヌ市内のキャンパスで執り行われた伝統的な式典では、名誉博士の学位記、メダル、肩掛けの式布(エピーージュ)が授与されました。

今回の授与は、化学・材料分野での世界的かつ先駆的な研究業績と、日仏間の学術交流への長年の貢献が高く評価されたものです。大越教授は、湿度応答型磁性、光スピントロニクスオーバー強磁性、キラル光磁性、磁化誘起第二高調波発生など、磁性金属錯体における

数多くの新現象を発見してきました。

また、東京大学およびレンヌ大学をはじめとするフランスの大学との日仏共同研究を長年にわたり活発に続けており、フランス国立科学研究所(CNRS)国際共同研究所の所長として、2017年よりInternational Associated Laboratory(LIA) IM-LEDおよびInternational Research Laboratory(IRL) DYNACOMを統括・運営し、現在、日仏で55名の研究者を率いています。2018年には、日仏間の研究交流への卓越した貢献が評価され、レンヌ市長から表彰を受けていました。

UTokyo 淡青カラーのミニボトル登場!

本郷建物柄シリーズで人気のステンレスタンブラーに続き、新たにUTCCオリジナルデザインのミニボトルが発売となりました! 定番のステンレスタンブラーよりコンパクトになり、軽量115gのミニボトルはちょっとしたお出かけなど手軽に行動したい時にぴったり。爽やかな淡青色に金色の銀杏の葉をあしらひ、シンプルながらも品格を感じられるデザインは、性別や年代を問わず使いやすく贈り物にも最適! 同じデザインのタオルハンカチと合わせてギフトセットにするのもおすすめです。日常に寄り添うマイボトルとして、ぜひご利用ください。



UTCCからのお知らせ

ステンレスミニボトル
銀杏(淡青) 容量150ml 2,800円(税込)

銀杏刺繍タオル
ハンカチ(淡青)
25cm×25cm
900円(税込)





「あたまの悪さ」を恐れない

地震研究所には、創設に携わった物理学者、寺田寅彦の銘板が掲げられている。

「本所の門に出入する者」が「日夜心肝に銘じて忘るべからざる」使命として、「科学研究と地震災害の予防・軽減方策の探究」を両輪に掲げる。こんな理念に背中をおされながら、研究をし、学生と接する私を勇気づけてきた寺田作品がある。随筆「科学者とあたま」だ。

その冒頭、さっそく不意を突かれる。「科学者はあたまが悪くなくてはいけない」。一見、逆説のようだが、読み進めると次第に寺田の意図するところがわかってくる。

「いわゆる頭のいい人は、言わば足の早い旅人のようなものである。(中略)途中の道ばたあるいはちょっとしたわき道にある肝心なものを見落とす恐れがある。頭の悪い人足ののろい人がずっとあとからおくれて来てわけもなくそのだいいじな宝物を拾って行く場合がある」

研究では「物事を素早く理解するより、分からないことと辛抱強く向き合う姿勢が重要だ」。私はこう解釈した。

ただ、いくら粘り強く調べても分からないことはある。学生時代、教授とデータ解析の結果を見て、うんうんと悩んだ末、「どうにもよく分からない……」ということが、しばしばあった。

やはり頭が悪いとどうしようもないのだろうか。ある時、残念そうにしている私に、教

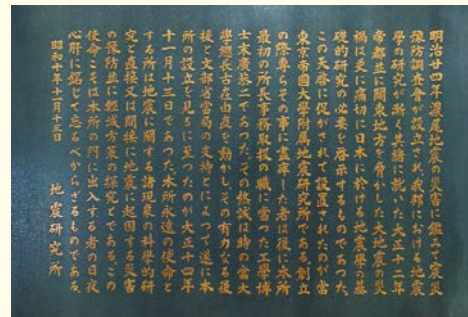
授はどこか晴れ晴れとした顔でこう言った。

「この分からないことをよく覚えておくことだなあ」

年月を経て、昔分からなかったことが、急につながり、分かるようになるという、うれしい経験を幾度もした。研究の道のりでは、ゆっくり進むだけではなく、一旦手放したかつての疑問に立ち返ることもできるのだ。その間に技術や関連研究も発展する。そしてこのような宝物を拾うためには今「分かること」以上に、分からないことを蓄えておく力が重要になる。

分からないことをそのまま「置く」ことには、気持ちのうえでも実際のうえでも難しさがある。それでも、分からないことを抱え続ける勇気が、いつか思いがけない発見につながる。だからこそ、「あたまの悪さ」を恐れず、晴れ晴れとおおらかな気持ちで研究と教育に向き合っていけたらと思う。

内田直希
(地震研究所)



地震研究所に掲げられている寺田寅彦の銘板